

追認するヤハウエ

—アブラハム物語における登場人物の関係—

水野 隆一

アブラハム物語には、主要な登場人物が2人ある。1人は主人公アブラハム⁽¹⁾、もう1人は、エピソードによってはיהוהないしはאלהיםと呼ばれている、神的な登場人物である⁽²⁾（以下、この登場人物を「ヤハウエ」と呼ぶことにする）。ヤハウエは、「正典」としてのヒブル語聖書においてはאֱלֹהֵי と読み替えられ、多くの近代語訳では「主」と訳される。

この読替は、登場人物ヤハウエを、信仰の対象である「神」と同一視したことから来ているし、同時に、この混同を固定化する役割も果たしている。しかし、物語そのものにおいては、あくまでも登場人物の一員にすぎない。本論文は、アブラハム物語においてヤハウエと他の登場人物、主にアブラハムとの関係に注目し、両者の関係がどのように描かれているかを文芸批評的な観点から分析し、登場人物としてのヤハウエの性格付けを明らかにしようとするものである。本論文では、行動の主導権を誰が取っているのか、誰が決定権を持っているのかという問題に特に焦点を当てる。その際、アブラハム物語の中から、この主題に関連すると思われる箇所を選び、前後の文脈や用いられている語の用法への関心を中心に、分析を進めてゆくという手法を取る。

出発と到着（創世記11:27～12:9）

ヤハウエと主人公アブラハムの関係、主導権の所在を考える第一の手がかりは、アブラハム物語冒頭のエピソードにある。

創世記12:1以下は、ユダヤ教、キリスト教双方の読者によってアブラムの「召命」（新共同訳の小見出し）の物語として読まれてきた。ヘブライの信徒への手紙が記す次のようなコメントは、そのような読みの代表だといえることができるだろう。

「アブラハムは、……出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発した。」（11:8）

確かに、「アブラムはヤハウエが彼に語ったように行った」と記されている（4節）。

追認するヤハウエ（水野）

1節には「行け」という命令があり、その後に「行った」（どちらも√ הלך の活用形が用いられている）と記されるのだから、ヘブライの信徒への手紙がいうように「服従し」と読むことはできる。そしてアブラムの召命と服従という読みは、この部分の決定的な解釈として、新約の著者やユダヤ教のラビたちを初め、その後の多くの読者に受け入れられてきた。

このことから、登場人物ヤハウエとアブラムの関係も、命令する者と服従する者としてとらえられ、主導権・決定権はヤハウエが握っているとするのが通常である。そしてまた、このエピソードはアブラハム物語の端緒にあたることから、この関係はアブラハム物語全体を通じて保たれていると考えられている。このような読みは、テキストをどのように区分して読むかと深く関係している。

シナゴグでのトーラーの朗読配分は創世記12:1から始まる。その表題も、**לְ-יְהוָה** と、1節にあるヤハウエの言葉の最初を取って呼ばれている。また、エキュメニカルに用いられている主日礼拝用の聖書日課、*The Revised Common Lectionary* においても、A年に含まれる朗読箇所は創世記12:1から始まっている⁽³⁾。一方、この読み方（読ませ方）は、宗教的な要請の中のみでなく、研究者による批判的な読みの中でも受け入れられてきた⁽⁴⁾。

しかし、創世記12:1から新たなエピソードが始まるという区分は、ヒブル語の統語法からは難しい。12:1は **וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל-אַבְרָם** とワウ継続法から始まっており、これは文字通り、前の文との「継続」を表すからである⁽⁵⁾。そして、12:1を新しいエピソードの始まりとしてではなく、以前からのつづきとして読むとき、そこには別の読みの可能性が開けてくる。いくつか興味深い読みの可能性があるが、アブラムとヤハウエの関係、主導権の存在に関する事柄だけを取り上げよう⁽⁶⁾。

テラとその家は、元来カルデアのウルに居住していた。しかし、テキストに記されていない理由から、一家は移住を始める（11:31）。その目的地は、「カナンの地」と明記されている。移住の旅はハランについたとき、これも記されていない理由から取りやめられる（32節）。テラの家以外のメンバーはハランに留まったが、アブラムとその世帯だけが移住を続け、当初の目的地である「カナンの地」に来る（12:5）。

ヤハウエの言葉を記す1～3節を考慮に入れなければ、アブラムの移住は、簡単に説明できる。「カナンの地」を目指して出発した主人公とその一行が、途中中断を余儀なくされたものの、最初の目的地まで到着したというものである。アブラムの目的は達成されたのである。

一方、ヤハウエの方でも、「行け、……わたしがあなたに示す地へ」という命令を出す（1節）、アブラムがある地点に来たときに、「あなたの子孫に、私はこの地を与える」と言う（7節）。こうして、ヤハウエがアブラムに「示す地」が示され、ヤハ

ウエの側の目的も達成されたと読むことができる。

双方の目的が達成されたことは、12:1からエピソードが始まるとして読んだ場合、ヤハウエの命令に対してアブラムが服従したと理解される。主導権はヤハウエが握り、どこがヤハウエの「示す地」かもヤハウエが決定する。ところが、11:27から始まったエピソードが12:1で中断されず続いていると読むと、主導権のありかが変わってくる。

ヤハウエの命令を受ける前から、アブラムはカナンへの移住を計画しており、途中までは実行していて、最初から自分が行こうとしていたカナンに到着した。ヤハウエは、アブラムの目的地を自分の「示す地」として示したのだ。従来アブラムがヤハウエに服従したと読まれてきたのだが、これでは、アブラムの目的と行動をヤハウエが追認したことになるのではないか。

このように考えると、12:1を新たなエピソードの始まりとすることは、ヤハウエという登場人物がアブラムよりも優位にある、命令する者であるとする読みを生み出し、守るために必要であると言える。つまり、ヤハウエの主導権を保証する区分が取られてきたのだ。

このことに関連して、ヤハウエが命令の中で言及している別の条件についても見ておこう。それはアブラムが離れるべき地に関するものである。

ヤハウエはアブラムに命令する際、「行け、あなたの地から、あなたの誕生（あるいは親族）から、あなたの父の家から、私があなたに示す地へ」と言っている。

מולדת という語が「誕生」を意味するのか、「親族」を意味するのか、断定は難しいが、この語は既に11:28においても用いられ、ハランの **מולדת** の地は「カルデアのウル」と言われている。

また、**מולדתך** と **ארצך** という組み合わせは、人称語尾を変えて24:4に再び現れる。アブラムは「わたしの地、わたしの親族のところ（**מולדת**）へ行ってわたしの息子、イサクのために妻を娶いなさい」と言って、番頭を遣わす。遣わされた彼は「ナホルの町」（10節）へ行く。こうして見ると、カナンでの生活が60年を越えているのに、アブラムにとっての「自分の地」「自分の誕生（親族）」は、相変わらずメソポタミア地方だと認識されていることが分かる。メソポタミアが「自分の地」「自分の誕生（親族）」だとすると、アブラムは、12:1の段階で既に、そこを離れていることになる。

さらに、12:1では父テラは既に死んでおり、家督は、長男と思われる（11:26参照）アブラムが継いでいたと読むことができるので、もはやアブラムの「父の家」も存在しない⁽⁷⁾。

とすると、ヤハウエが出した条件は既にすべてクリアされていることになる。そし

追認するヤハウエ（水野）

て、ヤハウエが「示す」地とはアブラムが当初から目指していた地であることも既に見ておいた。

一見したところ、ヤハウエは、理由を示さないというやり方で、絶対的な命令者として無条件の服従を求めているように描かれている。一方、アブラムも、質問を發したり躊躇したりしないというやり方で、絶対的な命令に従っているように描かれている。ところが、実際にテキストを詳細に見ると、絶対的な命令のように思えたものは、既にクリアされている条件を上げる見せかけのものであったことが分かる。また、内容も、既にアブラムが行動していたことを命じただけであった。

アブラム物語の冒頭において、目的を持って行動し、決定しているのは、アブラムである。ヤハウエは、アブラムの行動に対して、絶対的な命令という形式を取ってそれを承認しているのである。このような形で、2人の関係が提示される。主導権はアブラムにあり、ヤハウエはそれを追認する。

このエピソードはアブラム物語の冒頭にあるために、後のエピソードの読みにも影響を与えずにはおかない。

ロトの分離（創世記13:2～18）

12:1でヤハウエが「父の家」を離れるようにと命令したとき、念頭にサライとロトがあったという可能性はある。ロトは甥（11:27）、サライは異母姉妹（20:12⁶⁸）であり、共にテラの家メンバーだからである。サラについては、これ以降も様々な課程を経て、父の家のメンバーで「ない」という認定を受けることになるのだが、創世記13章においては、ロトの処遇が問題となっている。

ロトとアブラムの間に直接問題を起こしたのは、2人の「家畜を飼う者たち」の間に争いが起こったことであった（7節）。「その土地は、彼らを支えて、一緒に住むようにはできなかった。何故なら、彼らの持っていたものが多く、彼らは一緒に住むことができなかったからである」（6節）と言われている状況を打開するためには、双方の世帯が別々に住むしかない。そこでアブラムは、分離を提案する（9節）。

この中でアブラムは、ロトと自分の関係を「親族（אָבִיבְרָאָה）の人間なのだ」という。אָבִיבְרָאָהとは、「兄弟」を意味するが、同じ「父の家」のメンバーであることも表す。これはアブラムの認識を表しているが、アブラムがロトをאָבִיבְרָאָהであると認識していたということは、「父の家から……行け」というヤハウエの命令について、無視したとは言わないまでも、自分なりに解釈して受け止めていたことを明らかにする。

これに関しては、既に見たように、ヤハウエが「示す地」、目的地に着いたことを明らかにしたのだから、その前提となる条件、離れるべきものについて、ヤハウエの

側では問題にしていけないと言える。ロトがアブラムと行動を共にしていることは問題、あるいは命令不履行とは見なされていない。ロトとアブラムの間に問題が持ち上がったのは、おそらく水をめぐる、きわめて現実的な争いによってである⁽⁹⁾。

きわめて実際的な解決方法が提案され、それに基づいて、ロトとアブラムという「兄弟」が分かれていった後、ヤハウエはアブラムに語りかける(14節)。ここでは、ヤハウエがアブラムに語ったのが「ロトが彼と一緒にいるところから離れていった後」だったのだとわざわざ言われ、時間的な前後関係が、特に明記されている。

ロトが行動を共にしている間でもヤハウエは土地の約束をしていたが、その際は、アブラムの「子孫に」土地を与えるというものであった(12:7)。しかし、ロトが別れていった後のヤハウエの言葉では、「あなたとあなたの子孫に」と、アブラムが含まれている。ロトの分離の後なので、「あなたに」というアブラムへの特別の言及は、「ロトではなくあなたに」あるいは「ロトと共にいるあなたにではなく、ロトと別れたあなたに」ということを含意しているように思われる。ということは、アブラムの **אֲבְרָם** であるロトがいることは、やはり問題だったのである。

しかしヤハウエは、ロトが行動を共にしていることが問題だと、直接アブラムに告げ、解決を要求したわけではない。むしろ、問題が2人の間で起こり、それが分離という形で解決するのを待って、その解決を支持する形でヤハウエが発言している。ここでも、主導権はアブラムが握り、ヤハウエはそれを追認している。

ハガルとイシュマエル(創世記16章、17:18~21、21:9~21)

ハガルとイシュマエルをめぐるエピソードにおいては、サラが重要な役割を果たしている。

サラは、自分が「不妊の女」(11:30)であるという認識から、自分の「女奴隷(**אִמָּה**)」を使って「建てられ」ように考えた(16:2)。また、妊娠したハガルから見て自分が「軽くなった」(4節)と感じて、虐待した(6節)⁽¹⁰⁾。

イシュマエルに対して、イサクが14年という、埋めることのできない遅れをとっていると、サラは実感した(21:9)。イシュマエルは、この時点で少なくとも15歳になっていたが、サラは年齢差を見ただけではなく、イシュマエルの成長、より具体的には性的な成熟を見せつけられたのである⁽¹¹⁾。それを挽回するために、誕生の順序というルール⁽¹²⁾では太刀打ちできないので、問題を自分と「はしため(**אִמָּה**)」の問題にすり替えて、相続の権利は母親のステータスに基づくべきだと主張する(10節)。

これら、サラの行動によって、2度とも、ハガル(そしてイシュマエル)はアブラム家を出ざるを得なくなる。1度目は自らの意志で逃亡し、2度目はアブラムによっ

追認するヤハウエ（水野）

て追放されるのである。

16章では、アブラハムは、サラの要求に異論を唱えることなく従う（6節）。21章では、そのことを「悪い」（11節）と思うが、ヤハウエの忠告（12節）によって、結局はサラの言うことに従う（14節）。主導権はサラが握り、アブラハムはそれに従っている⁽¹³⁾。

ヤハウエもまた、サラの判断に従い、行動を追認している。ヤハウエの使いは、逃亡してきたハガルに対して、「帰りなさい、あなたの女主人のところに。自ら、彼女の手〔支配〕による虐待に身をゆだねなさい」（16:9）と語り、帰還を命令するばかりか、サライの虐待を容認する。ハガルとイシュマエルの追放をためらうアブラハムに対して、「サラがあなたに言うことは何でも、彼女の声に聞き従え」と主導権がサラにあることを認めるよう、促す（21:12）。

それだけに留まらず、ハガルをサラの「女奴隷」（16:8）、「はしため」（21:13）と呼び、サラを「女主人」（16:9）と呼んで、ヤハウエは2人にある地位の相違を固定化する。これは、イシュマエルをアブラハムの息子とする見解（21:13。17:20参照）とは矛盾している。ハガル自身も、このような関係の認識から自由になれないでいる（16:8）。サラとハガルをこのような上下関係、女主人と女奴隷の関係に引き続けるのは、サラの認識であり、ヤハウエはそれを承認するのである⁽¹⁴⁾。

ハガルに生まれたイシュマエルをどのように処遇するかについては、ヤハウエの側には明確な方針はない。サライがハガルという手段を用いて「建てられる」ことを望んだのは、おそらく、ヤハウエにとっては計算外の行動だったと思われる。しかしヤハウエは、妊娠中に、イシュマエルについての方針を決定する。

ヤハウエは、ハガルの子孫を「多くて数えられなくなる」ほどにすると約束し（16:10）、「大きな国」にするとする（21:18）。これらはいずれも、アブラハムに対して、与えられていた約束である（15:5、12:2）。また、生まれてくる子どもの名前を決定する（12節）が、この箇所にはイザヤ7:14との並行が認められる⁽¹⁵⁾。従って、イシュマエルも、インマヌエルと同様、「約束の子」であることになる（ヤハウエは、イシュマエルと「共にいた」⁽¹⁶⁾。21:20）。

サラとの間に子どもの誕生を予告し（17:16）、サラとの間に生まれるイサクだけを契約の対象とするという決定を通知する（19節）際にも、アブラハムの願いに応えて、ヤハウエは、イシュマエルを「祝福する」と約束する（20節）。

イシュマエルについては、様々な登場人物の思惑が衝突しているが、ヤハウエは最初、それに関与していなかった。しかし、妊娠・出産という事態がはっきりしてきた段階でイシュマエルを容認し、その後は、サラ寄りの立場を取りながらも、イシュマエルの受容を変えることはない。イサクとの関係においてはイサクを優先させながら

も、イシュマエルを切り捨てることはない。主導権は主にサラ、時にはアブラハムが握って行動しており、ヤハウエはそれらの行動を追認する。が同時に、一旦決定したイシュマエルへの態度を変えることはなく、サラ・イサクの要求との妥協点を探りながら行動していると言うことができる。

アビメレクの宮廷で（創世記20章）

ソドムとゴモラの滅亡を目撃した後、アブラハムはゲラルに移住する（20:1）。ゲラル滞在時に、アブラハムはサラのことを「妹」という（2節）。

同じようにサライのことを「妹」と言ったエジプトでは、アブラムは、サライの故に莫大な財産を手に入れることになった（12:16）。アブラムはサライを「妹」と言うことで、自分にとって「良いことになる」ことを期待している（13節）。語り手は、「良いことになる」とは財産を手に入れることであると暴露し、アブラムの目的が当初から、サライを利用して儲けることにあったと語る⁽¹⁷⁾。エジプトでの経験があったアブラハムが、ゲラルでも、サラのことを「妹」と言ったとすれば、ここでも財産の獲得が目的であったと考えられる。実際、アブラハムはサラの故に「1000シェケルの銀」を手に入れている（16節）。

エジプトへの移住と寄留については、カナンのに飢饉があり、それとかなり厳しかったことが理由として上げられている（12:10）。しかし、今回の移住には理由は記されていない。ただ、アブラハムの行動を見ると、ロトと娘たちのエピソードを挟んで、ソドム・ゴモラの滅亡を目撃したとゲラルへの移住が連続しているので、両者の間に何らかの関係があったことが推測される。それにしても、ヤハウエはこの場合も、エジプト移住の場合も、アブラハムに命令を下したり、忠告したりしているわけではない。アブラハムの判断であったことは明らかである。同様に、サラを「妹」と公言することについても、アブラハムの判断であろう⁽¹⁸⁾。

アビメレクに問いつめられたアブラハムの言葉（11～13節）をどのように受け取るかは、意見の分かれるところである。ことに、アブラハムとサラの関係を異母兄妹と考えるかどうかは、アブラハム物語全体の読みに関わってくる問題である。

しかし、アブラハムの言葉が事実であろうとなかろうと、アビメレクに対してサラのことを「妹」と言ったのは偽証になる。サラがアブラハムの異母妹である場合は「妻であり、妹である」という事実の半分だけ（“half-truth”）を語ったということで偽証であり、そうでない場合は完全な嘘なので偽証であるし、妹でもないものを妹と呼んだことでもう一度偽証していることになる。偽証は十戒の中で禁じられている（出20:16）。

追認するヤハウエ（水野）

サラを「妹」とするアブラハムの発言によって、アビメレクは、サラと結婚することになる（2節）。結婚している女性と関係することは、姦淫である。姦淫も十戒の中で無条件に禁じられている（出20:14）。このように創世記20章では、偽証、姦淫という罪が問題にされている。

しかし、奇妙なことに、アビメレクの姦淫は、まだ行われておらず（4節）、その意図はなかったとの主張（5節）をヤハウエも認めているし、未遂になるようヤハウエが取りはからったと言われている（7節）にもかかわらず、刑は確定し、執行を待つばかりになっている。ところが、アブラハムの偽証に関しては、何の追及もされていない。しかも、アブラハムの偽証が、まだ行われていないアビメレクの姦淫を引き起こすことになったのに、である。さらには、アビメレクの罪が赦されるためには、アブラハムの「祈り」が必要とされる（7節）。

もし、12節のアブラハムの言葉を、事実を明らかにするものとして受け取り、アブラハムとサラを異母兄妹と考えるならば、新たな要素が加わることになる。つまり、アビメレクとアブラハム、それぞれの罪に加えて、アブラハムとサラの、近親相姦関係が問題となる。旧約の律法は、異母姉妹であっても結婚を許さない（レビ18:9）。

ところが、律法は死刑をもって近親相姦を断罪するにもかかわらず（レビ20:17）、ヤハウエはこの2人を罰しようとしていない。これまでも、サラはアブラハムの妻として絶対的に重んじられてきたし、それが変更される気配はない。

むしろ、アブラハムとサラの関係については、ヤハウエが改善のために努力してきたと言える。エジプトでのエピソードでは、サラが一旦ファラオの宮廷のメンバーとなることを認めた。これによって、最後の「父の家」のメンバーであるサラは、アブラハムの「妹」としてではなく、「妻」としてだけ認定されることになる⁽¹⁹⁾。ゲラルでのエピソードでは、アビメレクの宮廷の女性たちの胎を開く（20:17）のと共にサラの胎を開いた（21:2）⁽²⁰⁾。ヤハウエは、アブラハムとサラの間に子どもが生まれることにこだわり続けたのである（17:16、18:10）。

このように見ると、アブラハムの判断と行動については、一切疑問を差し挟んだり、異議を唱えることなく、ヤハウエは承認しているように思われる。そもそもアブラハムがサラと結婚し、移住に同道したことから始まって、アブラハムが、サラを「妹」と言って多くの財産を手に入れても、アブラハムを罰することはなく、むしろファラオやアビメレクを脅かした。アブラハムとサラの関係は絶対的に優先させ、2人の関係が問題ならば、それが別の観点からとらえられるように、また機会を捉えて問題が解決されるように取りはからってきた。アブラハムとサラの結婚は既成事実として変えず、周囲の状況や判断基準を変えてきた。

一方、アビメレクに関しては、潔白であるという主張を受け入れつつも、アブラハ

ムとヤハウエの関係、アブラハムの判断と行動をヤハウエが追認する（＝祈りを聞き届ける）という構図の中でのみ、存在が可能とされている。

おわりに

これまで見てきたように、ヤハウエは、アブラハム、あるいはサラの判断と行動を、常に追認し、他の登場人物の判断や行動に優先させてきた。殆どの場合、主導権、決定権はアブラハムが握っており、ヤハウエの方がアブラハムに聞き従っていることが明らかとなった。ヤハウエの命令に従うアブラハムという、宗教的な読みは、テキストそのものからは支持することが難しい⁽²¹⁾。

しかし、文芸批評的な立場からすれば、このような、一方的な追認が常に行われるという登場人物間の関係こそ、「選び」の本質だと言うことができる。その意味では、アブラハム物語は、ヤハウエがアブラハムの判断と行動を、それがどんなものであれ、追認することを「選び」、その「選び」に基づいて行動した物語だと言うことができるだろう。

このような物語は、アブラハムの子孫として「選ばれた」人々にとって、アブラハムのように、神的存在の追認が常に用意されていると保証する機能を果たしている。このような機能こそが、アブラハム物語を繰り返し読ませ、神学的にとらえさせる、最大の要因なのだとと言えるだろう。

【註】

- (1) 主人公は初め **אַבְרָם** と呼ばれ、後に **אַבְרָהָם** と改名する (17:5)。本論文では、物語全体に言及する際には「アブラハム」の名称を用い、テキストの具体的な箇所について触れる際にはその箇所で用いられている名前を用いることとする。 **שָׂרַי** (サライ) と **שָׂרָה** (サラ) の扱いについても同様とする。
- (2) 2つの名前で呼ばれているが、この登場人物は同一人物だと見なしてよいと思われる。拙論「『アケダー』の縛るもの—創世記22章の文学的作用—」『神学研究』(関西学院大学神学研究会)第42号, 1995年, 9頁参照。
- (3) これは、3年周期の聖書日課であるが、創世記12章からの朗読は、A年に2回、レント第2主日と特定第5主日に現れる。The Consultation on Common Texts, *The Revised Common Lectionary*, Nashville: Abingdon Press, 1992.
- (4) 例えば、C.ヴェスターマンは、11:27以下を移行句であり「導入の役割」をもつとしながらも、一方で、12:1~3は「神学的な方向付けを行う」ものと考え、「族長物語の入祭唱」と呼んでいる。Claus Westermann, *Genesis 12–36, A Continental Commentary*, tr. by John J. Scullion, Minneapolis: Fortress Press, 1995, p. 146.
- (5) 新しいエピソードの始まりは、普通、それと分かる指標をもっている。例えば、15:1は、**הָאֵלֹהִים**

追認するヤハウエ（水野）

אָחֵר הַדְּבָרִים と、これまでの展開を受けながらも物語が新しい段階に入ったことを示している。また、16:1では、וְשָׂרִי אֵשֶׁת אַבְרָם לֹא יִלְדָה לוֹ と文章を、主語となる固有名詞（サラ）で始め、関心が移ったことを示している。文法的にはワウ継続法でありながら場面やエピソードの転換のための指標として働くものもある。וְיָהִי]であるが、これは、12:10でも用いられ、וְיָהִי רָעַב בְּאֶרֶץ と新しいエピソードを始める（他に、創17:1、22:1等）。

- (6) 他には、語り手の信頼度という問題も起きてくる。11:32は、アブラムの父テラが死んだという記述で終わるが、その文と12:1のワウ継続法が結びつくことにより、テラが死んだこととヤハウエが語りかけたこととの間に、連続性、あるいは因果関係が生まれてくる。しかしながら、アブラムが発したのは75歳のときであり（12:5）、この時、テラは145歳で存命中である（11:26参照）。11:32と12:1で暗示されている情報は、他の箇所を総合して得られる情報とは矛盾する。これは語り手の信頼度に疑問を投げかける。
- (7) 註(6)にも述べた通り、これは見せかけの情報で、物語中の状況とは異なる。
- (8) この節におけるアブラハムの発言が、真実を現したものであるのか、それとも言い逃れに過ぎないのかについては議論がある。筆者は後者を取っている。
- (9) 争いを起こした者たちが、「家畜を飼う者たち」であったことから、家畜の水飲み場をめぐる争いであったと想像される。また、「争い」を表すのに、13:7では רִיב が使われているが、これは、ヤハウエと民が水をめぐって争った地、מְרִיבָה（出17:1以下）と語根が同じであり、争いの原因が水であったことを窺わせる。
- (10) ここで用いられている√ ענה から派生した語は、出エジプトでイスラエルが経験した「圧政」「抑圧」を表すのにも用いられている（出3:7-8）。この関連については、次のものを参照。Phyllis Trible, *Texts of Terror, Literary-Feminist Readings of Biblical Narratives, Overtures to Biblical Theology*, Philadelphia: Fortress Press, 1984, p. 16.
- (11) サラが見たイサクの行為は、√ צחק のピエル語幹で表されている。創26:8では、「妹」と言っていたはずのリベカとイサクがこの動作をするのを見て、アビメレクが2人の真の関係（=夫と妻）を分かるという箇所が使われている。また創39:14、17では、ポティファルの妻が、ヨセフに言い寄ったのを拒絶された腹いせに、ヨセフを無実の罪で訴える場面で、この動詞が用いられる。置いていった下着を証拠に、ヨセフが「いたずら」しようとしたという箇所でも用いられる。この二つの用例が示すのは、√ צחק のピエル語幹には性的な意味も含まれるということである。ただ、21:9では目的語を欠いている。ユダヤ教では、目的語なしで√ צחק のピエル語幹を「自慰する」と解釈している。あるいは、目的語をもたないでも性交渉を行っているとして解することもできる。多くの近代語訳では、七十人訳に倣って「イサク」を目的語として補っているが、これは、次のサラの発言に引きずられたものであろう。
- (12) 旧約律法では、相続の権利は誕生の順によってのみ決定される（申21:15-17）。
- (13) ペトロの手紙1は、「サラは、アブラハムを主人と呼んで、彼に服従した」（3:6）と記しているが、それは、自らの主張を旧約に根拠づけるための、意図的な誤読であろう。
- (14) トリブルは、この発言やハガルに関するエピソード全体から、ヤハウエは「抑圧者の側に立っている」と言う。Trible, op. cit., p. 22.
- (15) 両者を原文で比較すると次のようになる。
創世記16:11 הַנֶּחֱדָה הָרָה וַיִּלְדֶּת בֶּן וַקְרָאת שְׁמוֹ יִשְׁמָעֵאל
イザヤ7:14 הִנֵּה הֵעֲלָמָה הָרָה וַיִּלְדֶּת בֶּן וַקְרָאת שְׁמוֹ עִמָּנוּ אֵל
両者とも、呼びかけを表す不変化詞で始められ、用いられている動詞は全く同じである。さらに、子どもの名前も、神名 אֵל を含むものとなっている。
- (16) ただし、この箇所では前置詞 אֶת が用いられている。
- (17) アブラムの発話では、アブラムのいのちがサラの「お陰で生きる」のが יִיטְבִּלִי בְּעִבְרֵךְ の内容だとされている。しかし、16節では、וַיִּלְאֲבָרֵם הַיִּטִּיב בְּעִבְרָה と記した直後に、莫大な財産が手に入ったと言われている。どちらにも√ יטב が用いられ（13節ではカル語幹、16節ではヒフイル語幹）、「アブラムに対して」、「サラの故に」という句も対応しており、16節に記され

た財産がアブラムの当初からの目的であったと読むことができる。

- (18) エジプトでの場合と異なり、ゲラルでは、サラもアブラハムも「兄」と呼んでいたことが分かる (5節)。
- (19) 拙論「族長物語を読む～文芸批評的アプローチ4:『書かれていない』?『書かれている』?」『福音と世界』(新教出版社) 2000年10月号, 6-7頁参照。
- (20) 拙論「アブラハムの義をめぐる」『神学研究』(関西学院大学神学研究会) 第41号, 1994年, 28-9頁参照。
- (21) アブラハム物語全体がこのような展開になっているからこそ、「徹底的な服従」(G・フォン・ラート)を主題とするアケーダーが必要とされる。ゲルハルト・フォン・ラート著・山我哲雄訳『ATD旧約聖書註解1 創世記1～25章18節』ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1993年, 433頁。拙論「アケーダーの縛るもの」15頁参照。Nahum Sarna, *Genesis, The JPS Torah Commentary*, Philadelphia: The Jewish Publication Society, 1989, p. 150も参照。しかし、登場人物ヤハウエは、そのような急激なキャラクターの変化に自ら耐えられなくなったので、アブラハムを止めたものとも考えられる (22:12)。